
無限のフロンティア スーパーロボット大戦OGサーガ

ハーケン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無限のフロンティア スーパーロボット大戦OGサーガ

【Nコード】

N0332M

【作者名】

ハーケン

【あらすじ】

極めて近く、限りなく遠い世界同士が『クロスゲート』と言う“門”で

繋がっているということだけだ。

異世界の住人たちの邂逅は、大きな混乱を招き、やがては“争い”を生んだ。

その戦いもいつしか終わり……。

世界は危うくも絶妙な均衡を保ちつつ、平穏な時を刻んでいた。

しかし… 23年前。

どこからともなく落下してきた、【飛行戦艦】と思しきものの残骸。それが世界の歴史を変えることになる。

… “未知なる開拓史”の歴史を。

… いつからだろうか？

この世界がそう呼ばれ始めたのは。

様々な“世界”が、あらゆる“人”が、そして“刻”さえも混ざり合う。

… ここが無限のフロンティア。

そんな無限のフロンティア【エンドレス・フロンティア】で生きている1人の賞金稼ぎの青年が主人公の話です。

お願いなもの（前書き）

【注意】

この小説は無限のフロンティアの原作沿い小説ですので、原作が嫌いな人は読まないでください。

それと主人公の名前が原作とは違います。なので、原作通りじゃないと思う人は読まないでください。

お願いなもの

はじめましてKEIといいます。

今回初投稿になりますが、頑張って書きたいと思いますので、よろしく願いします。

今回私が書いている小説はDSのゲーム「無限のフロンティア スーパーロボット大戦OGサーガ」の

主人公の名前だけ変えたゲームノベルです（ゲームノベルと呼べるかどうかは分かりませんが）。

出来ればこの小説を読んで、推敲をしてくれたり、書き足しをしてくれる共同製作者を募集したいと思います。

よろしくお願いします。

第一話―1【マティエーラ搜索1】（前書き）

ここから小説がはじまります。
ややこしくてすみません。

第一話―1【マティエーラ搜索1】

【第一話】

砂を含んだ風が舞い踊り、草木が一本も生えていないゴツゴツした岩山ばかりの荒野の中心に、ぼつかりと大きな口を開けている巨大なクレーター。その中心には戦艦のような金属の塊の後方だけが突き刺さっていた。どうやら、クレーターはこの物体の落下の衝撃で出来たものらしい。

クレーターの中心にある機械物を見つめていたのは、銀髪の青年だった。

風で飛びそうになる漆黒に似た色をしたカウボーイ・ハットのつばを指で軽く直し、担いでいる銃剣に見える武器を背負い直しながら、青年は冷静かつ、少し洪く聞こえる声で、その建物を見て呟いた。

「さて、始めるとするか。……いくぜ、アシエン」
「了解です」

青年の言葉にアシエンと呼ばれた彼の2、3歩後ろにいた、機械繊維で出来た緑色の髪を風になびかせながら全身が機械で出来た機械人形の少女がとても作られたとは思えないほど人間の女性に近い声で返事をした。

アシエンの言葉に青年は無言でこくりと頷き、2人は墜落した時に出来たと思われる亀裂の中から機械物の中へと足を踏み入れた。

石や、瓦礫が散乱して足の踏み場も無い荒れ放題な船内に足を踏み入れて
すぐに、分厚い金属の扉によって道を塞がれた。

冷たい雰囲気をかもし出す無機質な銀色の、人が悠々通ることが出来る

大きな扉には侵入者を阻むように警告の赤い文字らしきものが現われていた。

青年がその文字らしきものを目で追いながら、過去を思い出すように語ポツリと

呟いた。

「あれから…20年、か」

「正確には23年と63日です、リョウ・ブラウニング艦長」

アシエンの言葉にリョウと呼ばれ青年男はアシエンの記憶力の細かさに、

半分驚きつつ、半分呆れている表情で帽子を手で押さえながら呟いた。

「フツ……細かいな、アシエン」

ため息を吐き出しながら帽子から手を離した。

だが、アシエンは慣れたような顔で次の言葉を待っている。

「…昔話は後にするか。ともかく、ようやくこの飛行戦艦の探索許可が下りた。

ここで何があつたのか…いや、何があるのか…確かめる時さ」

「わかりました。…がんばってください」

「ああ。……って、おまえも関係あるだろ」

深々とお辞儀をするアシエンにリョウは思わず突っ込みを入れる。アシエンは冷静に返してきた。

「細かいですね、艦長」

「細かいくない。いいから早いところ、そのドアロックを解除してくれ。」

入口で引つかかっては、探索もへったくれない」

「ラジャーなのです」

アシエンが扉の隣にしていた扉と同じ銀色の小さな操作のパネルを色々と

操作をする…が、上手くいかなかった。長い髪をなびかせながら振り向き、

諦めたような顔でリヨウに声をかける。

「…なんかダメです、艦長。暗号とかすごい複雑だし、調べるのもかなり面倒です」

アシエンの言葉にリヨウは帽子のつばを軽くつまみ、呆れたようにため息をついた。

「いや、細かいけよ。何のためにお前を連れて来たと思ってるんだ？」

リヨウのため息まじりの言葉にアシエンはこくりと頷いた。

「了解。…演算処理強化のため、特殊コードを発動します」

「…“あれ”か。確かにパワーは稼げるが……」

しばらく考えた後、決意をした顔で頷いた。

「OK、シンデレラ…やってくれ。ここを開けなければ始まらない」

「了解。……では」

その瞬間アシェンから煙が噴出した。額のプロテクターが外れ、胸や太ももなど着ていたインナースーツが一部無くなった。そんな変化がアシェンに起こっている中、リヨウはその様子を見て考え事をしていた。

（熱暴走によって、一時的に性能をアップさせる…か。相変わらず不思議なアンドロイドだが、役に立つ。だが……）

「コードDTD発動！ ボクにまかせときんしゃい！」

性格と口調が180度変わったアシェンに、リヨウは帽子を深く被って

その上から手で押さえ、顔を隠しながら呆れた感じのため息をついた。

「…これがなければな。おい、アシェン」

「ん？ 何かな？」

「何かな、じゃない。何のために発動したんだ、お前は」

「皆まで言わずとも了解ちゃん！ この扉をブチ破ればいいんだよね？」

「…演算処理強化のため、と言っていた気もするが…まあ、そういうことさ」

「ウイス、じゃあやるよん。……ゲンブ・スパイクツ！」

腕をぶんぶん回して、いかにもやる気になっているアシェンの後ろで、

本日何回目か分からないため息をついた。

「おいおい……」

ため息を聞き流し、お構いなしに殴って、操作パネルを破壊した。その行動により扉が音を立てて開いた。アシェンはいつの間にか元の姿に戻っていた。

「艦長、開きましたのです」

「……OK、結果オーライってことだな。さて、行こうか」
「了解です」

（23年前のあの日……俺とアシェンが拾われた場所、か）

再び2人は中に向かって歩き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0332m/>

無限のフロンティア スーパーロボット大戦OGサーガ

2011年2月28日20時35分発行